

瀬戸内 新時代

④ 潜在力を生かす

着くと島民の約半数にあたる10人が船に乗り込み、問診やレントゲンなどの健康診断を受ける。

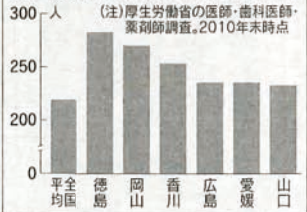
診療船の健診は年2回。93歳の女性島民は「約50年間、船で健診を受けてきた。小さなけがはしばしばあるが、おかげで健康を保っている」と話す。

「瀬戸内海の島しょ部は昔から過疎・高齢化が進んでいて、先進地域。医療の質の確保は長年の課題だ」と話すのは済生会・支



瀬戸内海の島々を巡る「済生丸」。済生会は新しい診療船の建造を決めた

瀬戸内地方は人口10万人に対する医師数(医療施設従事者)が全国平均を上回る(注)厚生労働省の医師・歯科医師・薬剤師調査。2010年末時点



遠隔医療島の健康守れ

28日早朝、広島県市町の桟橋を一隻の船が静かに出航した。社会福祉法人、恩賜財団済生会が運営する診療船「済生丸」だ。診察室や待合室、レントゲン撮影設備などを備え、医師や看護師、診療放射線技師など近隣の済生会病院から集った7人の医療スタッフが乗船した。

向かった先は広島県の野島。人口23人で、このうち65歳以上の高齢者が16人になる(7月末時点)。周囲12・5キロのこの島には常駐する医師がいない。島に

0万1億3000万円のうち、ほぼ半分を4県の済生会支部が負担している。船の老朽化に伴う新船建造にも約6億円を要する見込み。今後も事業を継続する

中四国にある瀬戸内6県の人口10万人に対する医師数は、いずれも全国平均を大きく下回っている。岡山、香川、愛媛4県の医師は、比較的恵まれた医療資源がある。瀬戸内各地で始まっている

医療格差を埋めるべく、一ト(情報技術)を活用し、遠隔診断やチーム医療の取り組みが、瀬戸内各地で始まっている。

50年間延べ約54万2000人が受診してきた。ただ、多額の事業費が重なることになった(岩本氏)という。

「健康を守る必要性や災害時の対応などを勘案して新船を建造することになった」

「生命」など都市部に偏在しておらず、島しょ部は医師不足が深刻。済生丸のような活動で支えられているのが現状だ。

格差解消の取り組み進む

トする看護師の育成に乗り出す。認定を受けた看護師がテレビ映像通信可能な専用パソコンを持って患者宅を訪ね、映像で医師の指示を受けてインフルエンザ検査やエコー診断を実施する仕組みだ。

岡山大学病院の循環器内科では、遠隔地に住む不整脈などの患者を一括管理する遠隔モニタリングを始め、中四国の約40の医療機関と連携し、現在、ペースメーカーや植え込み型除細動器を利用する患者約650人を対象に取り組んでいる。

広島では遠隔医療の基盤をつくるため、特定非営利活動法人(NPO法人)が立ち上がった。全国最大級の12人の常勤画像診断医を抱え、広島県内を中心に遠隔画像診断事業を展開するエムネス(広島市)の医師らが参加する。

エムネスの北村直幸社長は「医療の質を確保するためには地域密着型の展開が重要」と指摘する。医療人材育成では瀬戸内海をまたいだ連携が進む。「この症例では手術が可能か」「退院後に家族がケアする態勢ができていくか」

岡山大、広島大、愛媛大など中国・四国の10の大学が、がん医療のプロフェッショナル人材を共同で養成するプログラムの1場面だ。医師や看護師、薬剤師、放射線技師など多職種若手や大学院生が現場や職域を超えてチームを編成して演習をする。

〓この項おわり

四国

支局 高松 徳島

0088716521
0088816521
0088916521
0089016521
0089116521
0089216521
0089316521
0089416521
0089516521
0089616521
0089716521
0089816521
0089916521
0090016521